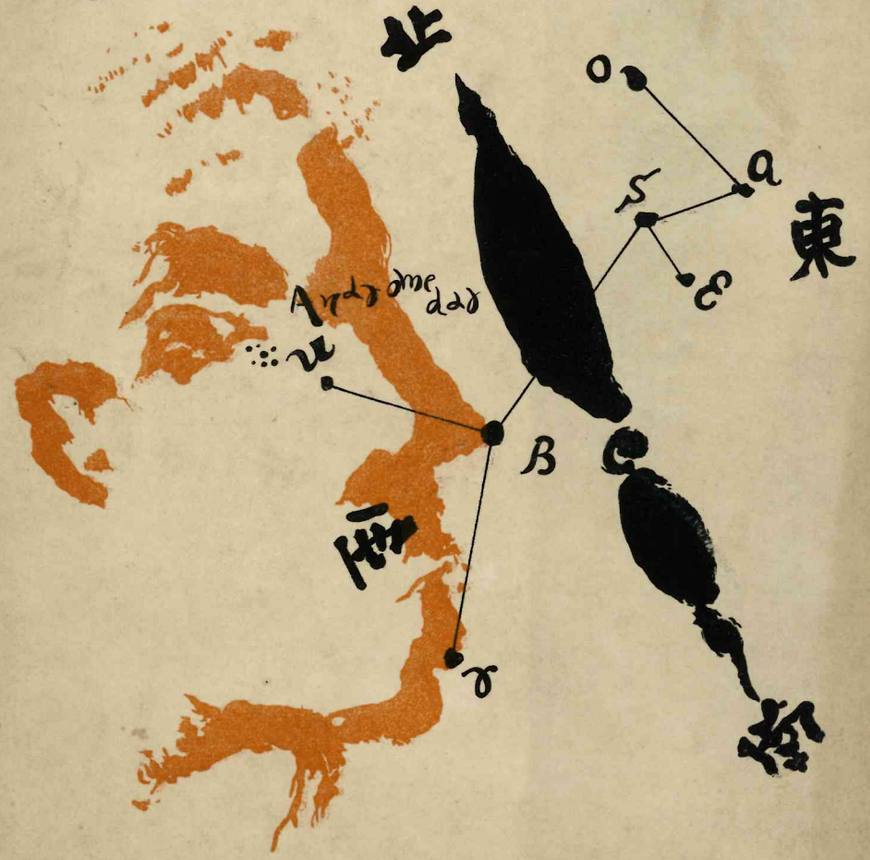
グレンデルの母親



永瀬清子詩集

永瀬清子・詩集

詩の家版

親母のルデンレグ 詩集

著 子清瀬永

詩之家版

詩集・グレンデルの母親

我を愛する人々へ

グレンデルの母親

永瀬清子

跋　佐藤惣之助

装幀　妹尾正彦

自序

私の詩は自由へのあこがれと共に成長した。

或は社會的には實に小兒的で個人主義を多く出ないものであらうとも、私の詩はただ自由へのはげしき呼びかけを意味した。無意識的にも。

私の舊き階級的生れ、及び境遇、性格はすでに運命である。私のこの運命の地點から、すでに傾ける階級の十重二十重の形式過重性を身に感じ、それは「詩」なる叫びをあげずにゐられなかつた。

もしもこの咏嘆的態度を、詩への、もはや過去に屬する面し方だと嗤ふ人があらうとも、又社會性なき自慰であると默殺する人があらうとも、これは私にとつての必

然であつた。唯物的に説明することもごく容易い程の宿命的事實ではあつた。

たゞ私は詩をとほして成長する。多くのものをふみくだいてゆきたい。こんな宿命をもつことは、別に客觀的な事實としての一つの條件以外の何物でもない。要はいかに明日へのためにこれを役立てるかにある。

かうして一冊として投げ出したからには別に卑下しようとは考へてゐない。けれどもこれらもはや過去に屬する自分に對して、一應のきびしい批判はもつてゐるつもりである。

これら卒業記念としての詩たちを世に出すのは、しかし、愛してゐるからだ。

私の幼い六ケ年の日も月も、思ひ出もこもつてゐる。これは私の生命のかけら自身である。

藝術は鬣(たてがみ)のやうなもの
彼自身の奔る時にこそ美しい旗じるしの如くある。
これは別に奔る道具ではないのだが。
私はそのやうに藝術したいと思ふ。
我が髪よ、なびけ。

一千九百三十年九月十二日記

永瀬清子

詩集例言

一、これは一九二五年春から、一九三〇年夏に至るまでの六ケ年の詩のうちから約半分を選んで編んだものである。主として雜誌「新生」「詩之家」「浪花詩人」其の他の詩誌に發表したものであるけれど未發表のものもないではない。今に至るまで殆ど詩集を編む氣にならなかつたので散逸にまかせてしまつたものもある。六年もたつ間には當時可成り自信のあつたものも、今の自分にあまり遠く感じられるものも多かつた。今を標準として、なぐられても庇つてやる氣のしないもの。賞められて苦笑するやうなものは出來る丈け除いたつもりであるけれども、尙、單なる記念のために保存したものもないではない。一番初めに作つた詩「氷河はひゞる」などはその一例である。しかし初めて日本詩人に出されたものや、ごく初期にかいたもので、當時詩之家主人に可成り賞めてもらつた小作爭議ものも、今となつては採錄出來かねた。

一、大體の傾向によつて三章に類別した。「冬の洞」は最もこの集の主要な特長をもつもの。「九月」は主として季節や自然に關するもの。第三の「火」はやゝ社會的時代苦に面した私をあらはしてゐる。類別した上で各々最近のものを初めにかゝげ、次第に初期のものへ遡る順序にした。「冬の洞」と「九月」の時期は相交り、「火」は大體ごく初期とごく最近の日附がついてゐる。

一、題名「グレンデルの母親」はグレンデルなる北歐的の發音が私の詩をよく印象してゐるやうに思つたので、集中の一詩から採つた。その詩が特に自信ある故にではない。

グレンデルについてはあまりよく知つてはゐないことを告白する。

英國古代詩にうたはれてゐる北歐の怪物の名であること、十二年に亘つて、毎夜王城を襲つて人々を戰々恟々たらしめてゐたが終に英雄ビオウルフのために退治られたこと、復讐に燃えたその母も亦、湖底の洞窟で、ビオウルフの手にかゝつてしまふこと。位のことである。しかし私の詩は別に豫備知識はいらない。私の詩の中のグレンデルは正確な傳說に據つたものでなく多分に理想化された私のものにすぎない。

英雄の味方としての傳記作者の眼からみたそれでなくして母の眼でみたグレンデルであるとも云へる。

一、選にもれた詩のうち、子供に關する短章丈けは、他日もつとよく成長せしめて集成したい希望である。

一、この集を編むにつけて、最初から色々導いて下すつた佐藤惣之助氏又裝釘のために病中をも省みず骨折つて下すつた妹尾正彥兄、其の他の助力をお願ひした吉岡千里師、妹澄ちやんの厚意を實に感謝してゐる。それを思つて幸福に感じてゐる。

詩集・グレンデルの母親・目次

自序……一
詩集例言……四

冬の洞

冬の洞……三
疲れ……五
グレンデルの母親……七
女性……一〇
彗星的な愛人……一三
麓にて……一八
空間に懸ける……二〇
黒犬と私……二五
孤獨……二九

野の眼……三一
秋斷章……三四
母……三五
夜の間の頁……三六
丘へ……三八
音叉……四四
大いなる魚……四六
星座の娘……四九
窓の恐怖……五三
靜かに焚く……五六
愛憎の鋭角……五九
氷河はひゞる……六二

九月

夏終る……六七
九月(一)……六九
一月の日記より……七一
大雷雨……七四
九月の歌……七八
(A)……七八
(B)……七八
(C)……七九
(D)……八〇
土の表現……八一
舊堤防の景……八四
(A) 犬の墓……八四
(B) 自由なる夢……八四
(C) 蘆原……八五

九月(二)……八八
菜の花の中の……九一
昔の陽と風……九三
街をゆく妖女……九五
夢々の國……九八
ざわめく竹藪……一〇一
九月(三)……一〇二
故郷の感……一〇五

火

火……一一一
岩・氷……一一三
コーヒーの進軍ラッパ……一一六

詩集　グレンデルの母親

冬の洞

冬の洞(ほこら)

冬の洞が座をしめる
冬の洞はふかい　あをい
青銅色の曉(あ)け方には
雪は翡翠のやうに茫と光つてゐる。

冬の洞に陶器の繪のやうに萬象は小さい
太陽も　煙突も　肉なき樹木も
又走しる黑犬の釣針のやうな尾も。
女の　いつか海蛇のやうにひえた髮々
つめたい指らは薄色鐘乳石となる。

冬の洞の内へ内へと沈積する私の魂。
冬枯れがちな泉や、人體の血液と同じく――
そして表面はさびしく透きとほつてゐる。

更に夕日がさす時　冬の洞はしんとしてくる
私は冬の洞の主(ぬし)だ
私は冬の洞の主要星だ
眞中に坐つて冬に更(ふ)けてゐる
まはりの　壁畫のごとき萬象に透き通つた瞳をむけてゐる。

――一九三〇・一――

疲れ

――一日の勞苦の果にうたへる――

夜はふかいふかい海なのだ
この豪慢なやうな魂は
刻々に地上の重壓を失つて沈んでいつた。
たつた孤りの思ひに靜かに沈沒していつた。

私は靜かに横はつてゐる。
今疲れの中に溶けつゝある
匿されたたのしい酒のやうな思ひのする
古いオルガンの鳴るやうな
肉體の痛みにみちた安易の廢船だ。

微生物の死骸ばかりほの白い海床についた時に――。
深夜の多くの精靈たちは
自由に私の身體を出たり入つたりする
魚がさうすると同じやうに――。
この刻々に解けてゆく身體は
もう夜そのものとの見分けもつかないのだ。

この希望のない
生命の鎖からほどかれたやうな時間――。
古い釘は皆脱けて涙も茫々と流れてゐる。

――一九二九・一二――

グレンデルの母親は

グレンデルの母親は
青い沼の果の
その古代の洞窟の奥に
（或は又電柱の翳のさす
　冥い都會の底に）
銅色の髪でもつて
子供たちをしつかりと抱いてゐる

古怪なるその瞳で
蜘蛛のやうに入口を凝視してゐる

逞ましい母性で
兒のやうに護つてゐる

子供たちはやがて
北方の大怪となるだらう
或は幾多・人々の涙を
無言でしつかり飲みほす者となるだらう

悽愴たる犧牲者の中をも
孤りでサブライムの方へ歩んでゆくだらう
惡と憤怒の中にも熔けないだらう

そして母親の腕の中以外には
悲鳴の咆哮をもらさぬだらう！

新鮮な礦物のやうな
夜の潭(ふか)みからのぼる月の光は
古代の沼に
或は都會の屋根瓦に燃え
グレンデル　の母親は
今洞窟の奥にひそんでゐる

——一九二九・四——

女性

白い林檎の一片のやうに
私は次第に空氣によごれて來た。
古ペンのやうにインキの匂ひがしみて來た。

女人の
しなやかな魔性や、遺傳や、美しい恐怖やは
さびるにまかされてゐる

私は男の子みたいに
着物のほころびに一本の指を差し入れながら

だまつて夕方の窓に坐つてゐると
錆はぼろ〳〵と底の方へ落ちたまつてゆく
隱花植物の花が散るやうに。

たゞ深い深い所で、
いつも憤りみたいなものが
まだ鋼鐵のやうに紫にひかつてゐる

——一九二九・六——

彗星的な愛人

象徴の相貌をもてる我が愛人よ
貴方は呆(ほう)けた野道の花のやうに飛びやすい
貴方はどこか太陽よりももつと遠い天體からの光の中に棲息してゐる
私は陽のさす半球に坐つてゐるから
いつもたゞ空しく想念のうちにのみ貴方を追ふ。

けれどもかつて私は貴方をまざ〳〵とみた。
私はこの世の果に於て貴方を感じた
明るみと闇との兩半球の
不思議な崖ぶちで貴方をみた

私が貴方に最後のさようならの手を揚げて以來
もう何年たつのだらう
今は私は時間の遠さをすつかり忘れてしまつた。
何十年何百年、あゝもつともつと長い間　私は貴方を見失つてゐる

その長い、あまりにも目のくらむ遠い時間を
私はたゞ自分の失つたものへと痛みくらした
去りたる戀人よ
私はこれから先、何年生きるのか。否何十年何百年生きるのか
私の身體には苦の花が咲き
私の瞼は日かげの龍の鬚のやうにのび、頰へと垂れ

それでも私はたゞひとり坐つて貴方へと悲しむ
我が戀人よ、何處にあつてもはや私に現れようとしないのか
私たちがはじめて唇を合せようとし
そして何か恐れてためらひ止つた時の
あの密度濃い空氣は　今どこの宙間を流れてゐるのだ。
あゝ貴方自身も曉の光の中へでも化合したのか。
でなければほの白いその光の中で
不意に私に潛在の涙が湧くのは何故だらう。
もしくは曉が　つめたい微風をともなひ
靜かに夜を發つ時
多分知らずに私は貴方から一歩遠ざかつてゆかうとしてゐるのだらう、そ

の涙は。
一夜の盲目な彷徨を終り——
さうだ、かつて貴方が私にあらはれた時
そんな　陽のものとも思へぬ光に乘つて來た
貴方はあけ方の野末の雜草の中を私と迷ひ
そしていつか消えて行つた。
その時貴方は母の面影をもつてゐた。
おゝ草の微毛のやうにとびやすきものよ
複數の相貌をもてるものよ
私は晝間あかるい中に坐つて

眞空の中でのやうに物忘れしてゐる
涙はかわき　自身は輕いばかりだ

たゞふとひどく暗い展覽會の片隅などで
おゝ、こゝに彼のパレットから來た色がある！と
一瞬に何百年の谷をとび降りることがある
否々けれども私はいつもちがつてゐるのだ
私は粗忽の重い罰で
憂鬱に平癒の細道を再び這ひ上らねばならぬ
又ひどくかびくさい古道具屋で
ふと、あゝあすこにあるのは幼い私たちが一所に造つた玩具の軍艦だ！と
　思ふのだ

でも駄目々々、やはりそれはちがつてゐる
私は決してこの陽に傾斜する半球で彼をみることは出來ない

おゝ飛びやすきものよ
彗星めくものよ
太陽熱をともなはぬ愛人よ
私らは永久に反對の半球に住み
たゞ悲しみの本能ばかりのこつて
いつもたゞ空しく想念のうちにのみ貴方を追ふ

——一九二八・九——

麓にて

愛の高嶺を私は知らない。
その美しい噴火も知らない。
幾年か麓の憐情(ピティ)にはさまよふが――。
やがて麓の林に氷はしたゝり
雪の下の苦がい果實を私は拾ふ。

(古い友に悲しみを
苦ふかい親にはなげきを
與へるために私は來たか。
冬、今くらい星の下にうづくまつて

夏の日の向日葵など想ひゐがけば
石の裂目が凍ほるやうな
我身の冷たい音が聽かれる)

友よ
私をもはや探しても駄目だ
踏みまよひ踏みまよひ
遂に高きには至れずに
私は朽葉の中にひそむであらう
恥かしさに探がし出されるのも　つらいだらう。
冥い林にひそんでゐて
時に遠くの空の美しい噴火を仰ぐであらう。

――一九二八・二――

空間に懸ける

思ひ出らは
十一月のみかん山に
きいろく枝垂れた酸い蜜柑のやうに
遠い空間に懸かつてゐて
常に酸つぱく静かにかゞやくがいゝ。
時間がそつと醸(かも)していつた僅かの甘さと共に
悔恨の酸さも苦がさもあまさず
私は躊躇なく逃避なく日毎たべよう。

私は夜、外に出て

地平からのぼつてくる星たちに
一ッ一ッ名をあたへる
あたらしい神話を名づける
この星にある時の嫉妬の心を——
あの星にかのいたき痕口を——
裏切りや——
我が愚かさや——
母の涙を——
又あの星は十七の夏の別れにむしりちぎられた鳳仙花。
北空の青いろはかのガラス繪の、そのこはれた缺けら。
痛く酸い思ひ出を私は忘れようとは思はない。

夜毎に星にかたりきかせ
それを天空にはめておくのだ。
みんな私の小さい足跡の花の
天へ昇つての標章である
いまにクロウヴァの花のやうに
天いつぱいに咲きみちるであらう

あゝその多くの思ひ出が
私の眠つてゐる時さへも
きらびやかに空間に懸かり
一齊に酸く青い思ひの矢をつがへ
私をみおろし見張つてゐるのだと云ふ考へは

私を堪へがたく生きがたく思はせる

否、けれども私のさゝやかな一生の
何と取りかへることも出來ぬ大切な一條の足跡を
一度しか通れぬこの道を
どうして忘れたいと思へよう
私の人生がこれだつたのだ
たゞ私は人生をかくの如きものとのみ知る
私はなほも手をのべて黄なる皮をはぎ
日毎その酸い味をむさぼらう
いやが上にその味を胸に染まさう

あゝかくして、かくして後
なほも人の世ををしみ、いつくしみ
我身の内に暖かい乳と變へ得るかみたい。

——一九二八・五——

黑犬と私

犬をつれてあるいてゆくと
犬が私の心の欠乏を嗅ぎつけると思ふ。
犬は私の心を甜めねぶるのだ。

——(犬の心には原始が映る)——
——(犬の眼には空の海が溜まる)——
——(犬の耳に人のゆかぬ洞窟の草がそよぐ)——

犬よ　野山を帶びた心で私を識れ。
空のうかんだ眼で私を視よ。

又森の菌(きのこ)の如くひえた鼻で私を嗅げ。
さてお前の心象に何があらはれたか。

私の貧困をお前は視た。
私は日も夜もひもじいが
でも我が欠乏は正しい

私はかぎられた時間に住み
私は肉身をかなしい逃がれられぬ生來の柵と思ひ
又熱ある時にはいつも　きまつた夢に驚く。

犬よ　お前にはこの不思議に堪へがたい制限感はない。
私はもつと異常なる
あたへられる筈以外のものを欲望する。
否々熱望するものはいつもどつかの遠い所に懸かる
私はこの世の引力以外にとびたいのだ
犬よ　お前にはこの激しい欠乏感を知るまい

お前の眼には空があり
お前の心には原始がある。
お前は地平の雲の中へも驅けてゆかうと思ふだらう。
時間の重さよ。
肉身のかなしさよ、愛するあまり捨てたくなる。

こらへこらへ犬をつれてあるいてゆくと
犬がぺろぺろ甜めてくれる
犬にお甜めお甜めと云ひたくなる

――一九二八・四――

孤獨

誰も他の一人についてゆけない
私は瓶の大きなチューリップをみて
不思議な思ひをしてゐた。
チューリップの中はおそろしく深くて
何か暗い海みたいなものがゆさ〳〵とかたむいてゐた
そして私はなにか物恐ろしくてのぞく事が出來なかつた。

毎日ふくらみ毎夕つぼみ
なにか生きてゐて私を惹いたが
やがて今朝すつかり葩をこぼした

今は不思議な花の中はあらはに
廢墟のやうにあかるく莖はたつ
なほ渦卷いた蕋の柱頭をさゝへ――

まるでどんな秘密もなかつたんですよ、と云ふやうだつた。
でもでも私は不思議だ
もう何も住んでゐない神殿のかけらは
机の上にちらばつて乾いてゐるが
花は花自分丈けの天國へ昇つてしまつた。

一九二八・四――

野の眼

冬は
版畫の蒼き空のごとく次第に我が方へとにじみ寄す

巨いなる北風の越えすぐる野の中に
絶えずひゞき鳴るガラス戸の
氷張る音樂をまはりに聽き
卓に凭れる寒き一人。

立ちてみる野の風花
つよく舞ひゆきて丘邊に消ゆ

又迷ひきてガラス戸にとまれる
その白き面影をもいとしめよ
ガラス戸の内にして
熱ある唇にそを吸へ吸へ。

我は人と斷ちてこもれる孤り
夜の
はるか凍れる地平より頭上に至れる
そのつや濃く張りみてる空をあふぎ
牽きあへる星らの
幾萬年渝(かは)らざる曳力におどろけり

日に日に冬に埋れゆく
野の中の一ッ眼なる家
なほ光るガラス體して空を覗へり
重く固き物質感もつ
寒氣の中になほ瞠(みひら)けり
みひらきて物象の本然の
とぎ出さるるをむさぼり見たり

我こそ一人住む眼の中の眸
氷の下の魚のごとく生きゐて
時に黑檀色の卓に凭り
我と世の冬を凝らし視たり

一九二八・二——

秋斷章

恐ろしき脱け毛をもち
朝毎のつめたき鏡にむかふ
なみだながし、なみだながし、——湖面のさゞなみ——
そのあをき痛傷の湖心なる瞳に凝視(みい)る

——一九二七・一〇——

母

母つて云ふものは不思議な強迫感にも似た、かなしいもので
私の意識の底ではいつも痛みを伴なつてゐる。
母はほんとに貝殼みたいにもろく、こはれやすく
しかも母の影を負つて生れたことが、私にはどうすることも出來ない。
つらい、なつかしい夢みたいなもので、
眼がさめてもいつまでも神經がおぼえてゐる。
どこへ自由に行くことも出來はしない。
一寸動くとすぐこはれて、とげのやうにさゝる氣がする
實に痛い。どうすることも出來ない。

——一九二七・一〇——

夜の間の頁

疲れて夜も
生活の讀みのこした頁を顯然(あり〳〵)と反芻する
晝間とばして行つた文字と挿繪の
怪しい亂れがちな印刷のあひだを再び旅行する

我が強き愛の飛びゆく
野山を越えた遠い人々の面影を——
又この嘆ける心情のみだれに
起らうとして辛うじて起り得なかつた出來事の數々を——
更に又

わが罪過の
死にまで至る夜毎の懺悔を——
負債の償ひを——
あらゆる拘束より解きはなし
それ〴〵の定めの頁に活字して貪り讀む。

繰返し〳〵
なほ心やすまらぬ思念は
更ければ月夜茸のやうに茫とひかりはじめ
私は終にまひるの現實だと迷はされてしまふ。

——一九二七・八——

丘へ

モリコのからだをいたはりながら
夜　歸つて來ると
匂ひでいつぱいになつてゐる
そこらの闇の底に溝がうたつてゐる
天體はみのりこぼれて
熟れた菜たねのさやのやうに
さや〳〵とはじけあつてゐる

モリコよ
こんなみちあふれた風景の片隅を

背をかゞめ
首をかたむけて
私はお前を注意ぶかく抱きながら
お前の死んでゆくのを
胸で感じながらあるいてゐる
ねえ
靜脈めく田舍道にこぼしてゆく涙は
どんな青い草の種になるかしら

やはらかい虎毛の耳で
私の鼓動をおきゝよ
お前とお友達になつてからまだほんとに短いが

それももうぢき終るだらう
ほら
このきすが意味するのは「別れ」だよ

けれども　お前は始終私を感じてゐたね
私はお前が私の悲しみを嗅いでゐた事を知る
又私の孤獨をあとつけて來た事を知る
私が烈しい病熱におそはれた時
お前も亦感電したやうに發病した
私はやがてよくなつたが
お前はよくなる事が出來なかつた。

私が病後のゆれやすい心臓をさゝへて
お前の病氣をたづねに
土橋の角に高いアカシヤのある獣醫の家へ行つた時
野の風がどんなに私にさゝやいたか知つてるか
お前と私のそのつながりに關してだ
そして共通な冷淡な人間に對する怒りだ
（お前のことを利害的にしか考へぬ『人間』！）
お前も亦知つてゐて呉れるだらう
（その私の「ひと」に對する悲しみを！）

モリコよモリコよ
獣醫のをぢさんにもみはなされ

私の胸に來て最後の息をしてゐるね
私ももう疲れて來た。
モリコよ
野の中にもうかの家の灯はみえて來たが
もうその灯の中へはかへらないで
丘へのぼらう
丘はみのつた星々に近く　人に遠い
死ぬにいゝ所だ　靜かにお死によ
最後の不思議な喜びの時間をすごさうよ

死ぬお前を不幸とは思はない
が冷い心に死を豫想されながら

生きかへつた私が幸か不幸かはきめる必要はない
人間　私は
又立ちあがつて悲しみと愛との戰ひの中へ
疲れつゝ雄々しく入つてゆくんだよ
モリコよ

さあ丘へ
匂ひみちた最後のたのしき時を
モリコよ

——一九二七・四——

音　叉

彼は死んだ。
死屍をめぐつて
怒りにも似た絶望の嵐を舞踏すれば
肉身の腕はあゝ　くちなし色の音叉となる！

その響は、無窮のかなたにはげしく顫ひ
彼の魂を追ひ求めて驅けるよ
おゝその響。彼を纖い觸手に卷いてかへれよ！

彼は死んだ。

死屍をめぐつて青くさかまく舞踏のかなしさ。
この音叉の祈るがごとく顫ひ顫へば
彼の内に應じて鳴りいでる
かすかな響きのありはせぬか——。

——一九二六・一二——

大いなる魚

とある時私は標本の蛾のはゞたきをきいた。
あの三角の、彩(いろどり)みどりなる更紗の翅で、あれは飛ばうとしたのだ
——いえ、勿論逃げられはしなかつた。

誰だつてはじめには
武裝した若々しい槍手のやうな
白く光るペン先にも似た、鋭い野心をもつてゐる。
だからあの青いインクの酸性の液體を
かなしい匂ひだとうたふのだ。
錆ればやはり

標本にされた昆蟲の、翅の死骸の一片で

さもあれ眞夜中
神經系ばかりの手枕に
耳をあて、きゝすませば
生命の深いわだちの音、汽罐(かま)の音
又すみやかに捕へがたい魚が住んでゐて
その強い尾と鰭で、
時にうねり高いしぶきを揚げ、しぶきは氷る

終點のシグナルが示すは青い「標本」か又は「錆」か
たゞこの瞳をじつとのぞいて御覽。

まつげの陰を　大いなる魚がつよくすみやかに
歸趨を知らず私を引ずりゆかうとするのだ。

――一九二六・一――

星座の娘

身近くせまつて來る人々の愛が
夜更けには
私の肉身の部分部分を作つてゐる
魂がそれらの中を流れめぐり
私は
巨いなる天空の神話の娘が
星の鋲でとめられてゐるみたいな束縛を感じる。

星々は夜には
幾多の宿命を含む地上からの視線で

原始以來みがかれた鑛物だ
北より南よりの
喜び悲しみを惹いて
重い期待を集めてゐる

私は私自身では
輕く飛びやすい者だけれど
それらの星に刺されてゐて
多くのつぼみを含んだ椿のやうに感ずる

暗い夜を通して私にまでうかび上る
花咲かうとする蜜にみちた熱意が苦しい

星々の鬱血質の重さ！
自分はどの引力にまかしていゝのか
私はどこへよろめくのか

夜が一刻々々凝つてゆく時
天の神話の娘は
何万年はりきつた
星と星との銀絲の綱をたち切り
青い蜘蛛の如く
しきりに空間へつりさがらうと意志しまいか、

あゝ多くの病(やまひ)ある恩愛から
寒い自我を割きとつて
錘りのやうに
唯一の重力を信じて下へ！　下へ！

――一九二六・一――

窓の恐怖

更けてくると
唇は苦がい味がして
月光を吸へば　青い藥草の汁の樣なので
今はもう、つやなき辭書の活字を追ふにもつかれはてた。

底深い眠りを降りようとすると
しめつぽい階段にひろがつたのは
光る鱗もつ羊齒の葉
そこに陰氣な彩異つた窓々があつて
待ちうける影多きものゝおびやかし。

顔・顔・黄なる蛇、わらふ昆蟲、猫。

世の一隅にとある日
ぬぎすてた手袋の
その腕長く
生命なくしなびた黑い指をひろげ
凄じく　つかまんとする。

ましてかの瞳一つ
その燃える菫色の炎！

夜毎の窓は恐ろしい

外の見えぬ疾風の如き汽車にのつて
忽ちに人生を過ぎてしまひたい。

——一九二五・一二——

靜かに焚く

夕ぐれ私は
君へと香を焚く
青銅の古びた香爐

うすい月が出てゐる
家々の屋根はまだ波立たない
でも竹の葉は川魚(うを)のやうに冷えてきた。

青みがかつた纖い人造絹糸の蟲の聲は
するどく幾すぢも空間をふるへのぼる

小さな翳ふかい部屋にひとりすわり
さびた香爐の私は
うす紫の煙で月にからまるが
いつの間にか
靜かに私の氣魂は焚きつくされる

私が空虛になると
やがて光をまして來た月が
急にとがつて痛くなつてくる

そして描き更紗の草の葉のほそさで

空に一度投げあげられた蟲の聲は
噴水のくづれるやうに亂れ落ちる

重みと痛みに堪へきれなくなつて
夜更け、私は終にくづれる
なんて淋しい青い破片だ

あゝ！
月の小さくしぼむ頃
白くつまみあげてはしみ〴〵ながめる。

——一九二五・八——

愛憎の鋭角

心、風のごとく漂々と吹かれたい。
はる〴〵と靭やかにたゞよひたい。

あゝ！　可燃鑛物の心をもつ。

これは連日のあまりにも濃い空のせいか。
もはや水晶體のピントはあはない。
青空を頌め　青空を詩ひ
青空の奥がをうかがひつゞけた瞳の底に
硝子の片の樣に青はこはれかけてゐる。

（心、風の如く漂々と吹かれたい。）

私はその鋭角に堪へきれず
瞳をふせ、白い菌のやうなひえた指先で網膜をおさへるが
内部で焔のやうに青が燃えてゐるのを觸れ感じるばかり。

あゝ！
はる〳〵と心たゞよひてあれ！
夜は、
星に深まる空の靜けさをもつて
どんなにか、ばらの新芽のやうな健康の眠りをゆきたいことか。

若き愛憎にも執せず傷まず——

——一九二五・一二——

氷河はひびる

今宵乳色の思念の中にひそみて
しげ〳〵と我を螫すのは何者であるか
眼にもみえぬその傷口よりにじむ疼きに
我が空はいたく波うつ。

接骨木の
玉のやうに光澤あるみどりの實が
たえ間なくしめつた土にまろぶのは
我が胸に落ちつもる悲哀の重みか

此の夕べ緣側の柱の下に一人坐れば
風はしきりに青葉をみだし
濃い海老茶色の楓の花をゆする
やがて思念の靄の奥がをうかゞひ
我を螫す正體を見出すは悲しい。

美しい華のやうに陽にかゞやかしく
長い年月を我が心の奥がにはりつめ〳〵た
氷河がするどくひゞ入る音がするのだ！
あゝ我が乳色の思念を螫すのはそのひゞきだ！
ひし〳〵と華やかな年月の記念にひゞ入る音

水晶のごとく美しい鋭いその音をきけば
我が空はいたく波うつ——。

——一九二五・五——

九　月

夏終る

今は、健康な九月に近い自分を感じる
あらはな腕は地平線のやうに
靭やかに陽を吸ひこんでゐる
朝の草原で禾本科の草みたいに滿身に風をうけてゐると
レースの衿ははたはたと頰にはばたいてゐる

誰か窓に腰かけて青りんごを嚙ぢつてゐるよ

道いつぱいの夕日の中に子供の椅子が置き忘れてある。
麥藁色にまぶしくかゞやき、その翳は半透明にあをい　あをい

遠くの屋根が片かげりして海のやうだ。
女の子はそこに、忘られたすひさしの煙草みたいにあふむけに空をみてゐる

九月

九月——やゝに傾き初めた我が地球は紫の翳をもつ。
虚無の斷崖にまで至る大空の
半透明なる水氣(えいほあ)の中に——
又海鳴りのやうにわたつてゆく「時間」の
昨日にかはる雲母ずりの速い流れ。
「あかるい半年」の花束はかなたに投げ捨てられ
みる〳〵遠くへと輝やきつゝ去つた。
九月——人と人との間の無限の空間が顯れてくる
——離れまいと星らのやうに惹き合つてゐたことをいつか忘れる
——引力にみち切ない感情に鳴つてゐた空間が空虚(うつろ)になつてくる

たゞ戀人は一條の線に在る
我が孤寂の魂は
すでに冷えそめた物質の横貌を
殘れる醉情をかたむけて凝視する

九月――太陽の光は半流動し
放心の私は
中空にひとり廻つてゐる
中空にひとり廻つてゐる

――一九二九・九――

一月の日記より

旅に出てさびしき景色に逢へり
山腹の植林をわけて
煙は默々と匐ひのぼりゆき
やがて吹雪に消え入れり
一枚の窓ガラスに竄(か)くれ
我も白き吹雪の中をわけゆけり

遂にふるさとに還へり憩こふ
ふるさとの庭に風ありて
終日竹の葉のさやぐばかり

○

ふるさとは遠きにありき
ふるさとにかへり來たれど
なほのこる時のへだたり
こもりゐてたゞ聽く葉ずれ
古き友にも會はず

○

ふるさとより戻り來たれば
ひとしほにはるかと思ふ
枯芝にミオを抱きて
小犬らとたはむれ居れば
冬の日は照りまた翳げる

光る雲とほく流れて
ミオの瞳にあをきかなしさ

——一九二九・一——

大雷雨

たちまち
遠く淀川堤防の線が
一絃琴の音をひきしめたやうに
宙間にかぼそく漂と浮かんで來た

野を今あかるく白馬が驅け過ぎる！

煙銀の光ある翼をはゞたき
うすあをいしぶきをあげる野面と
地に近々と垂れた雲との間を

高貴な白馬は、怒れる白馬は
何物の障げも知らず驅けゆくのだ

おゝふりみだる鬣の
雨雲を打つ綠光！
おゝをどるその尾の
風に渦まく銀灰！

轟ろく潮の音に乘る
美しい一個の波頭のごとく
逆卷け　逆卷け
たうと逆卷いて野を奔りゆけ

桎梏多き窓から人の子は今
奔騰するおんみを眺望め
高く揚がつた感情の
怒りにも似た強靭な彈性をもりかへすのだ

かゝる崇高い白馬を放つ天と地をほめよ
かゞまれる人間の魂に紫光を射こみ
かつて放たれざる意慾に
自由感の大いなる雷鳴をとゞろかし
あゝあれ北の方
堤防の漂とした一線をのりこえて

まひるあかるく白馬は通りすぐ　通りすぐ——

——一九二八・八——

九月の歌

A

いつしかに陽の光が斜となり
條脈ふかい向日葵の葉は
片側ばかり金屬のやうにひかつた。

私はどこか空の遠くに
絶えず鐘のなるのをきいた。
運命が風と一所に流れてきて
自分をどこかへ押しながしてゆくのであつた。

B

妹たちも父母のもとへ歸つていつた。
あゝそれでよいのだと私は自分に云つた。
私は又しつくりと身に合つた孤獨を着けれると思つた。
けれども彼女たちの撒いていつた笑ひ聲や足どりは
野の叢や川ぶちにひそみかくれてゐて
いつまでも私は孤りになれなかつた。
それらは鮮らしい礦物の片のやうだつたが
なにか昔のかへらぬ私を映してゐた。
九月——
私は遠い遠い日のかたみのやうに
かなしくそれらのものを拾ひあつめてあるいた。

C

あの眞青な山脈の方へ
風は空をこうこうと鳴つていつた。
山の方から幾臺もごろごろと
荷車で梨を積んできた。

せまい街筋に電柱ばかりそびえ
わたしは懷手して
遠い光るものをみてゐた。

D

私は夜更けてから
ひとり叢の石に坐つた。
石は白く露の中に沈んでゐた

果から風が渡つて來て
丈よりももつと高い蓼類や野菊の叢をそよがすのだ
自分が原始の中に落ちこんでゐるのであつた。
そして夜は星ばかりでいつぱいであつた
そのまゝだん〳〵傾いてゆきながら
少しの亂れもみせぬ比べやうもない星座の大きさを
私は小さな自分の呼吸で息した。

——一九二八・九——

土の希望の旗じるしよ。
次の季節のために風にはためけ、ジャンクの帆と鳴れ！

土の表現

植物は常にゴシック建築の如く空へと擧げる土の信仰の手だ。
時にそれは虔しい念珠をまとひ――。
植物は土の歡喜の炎
それは荒々しい叫びとうるほへる音樂をもち、又いたる所の地表
　にもえる
又雷電によつて地の怒りを空間に放つ喇叭よ！

――（土の成長欲の喬かき噴水）――
――（土の原始的な感情のたてがみ）――
――（又土の生命力の尖端！）――

土の精神にこもりきれぬ感情や意志が
沈默よりあふれて表現にとめる植物とはなる
わが鮮らしいおどろきはしばしばその上に！

むすめのゆたかな髪のごときもの。――「もつと光を」享けたい
　との土の渴望でのびる。
あゝ遠き海へのあこがれ――ゆら〳〵と波うてるもの。
つねに影をおとし、空への想ひの梯子となるもの
實に小さい芽にも皆掌があり、いかなる所からでも父・太陽に
　キスをなげる。

一九二八・二――

舊堤防の景

（A）　犬の墓

草の中の犬の墓の上に
爪みたいな纖い月があらはれた。

土の中で
ミルクくさいあれがその光を感じて吸ふ。

（B）　自由なる夢

廢たれた堤防と角度して
葱坊主のうねが三列

堤防よ
白い波を蹴る船を夢みるか。

（C）

蘆原の中の細い砂路だ
水を汲んで鮮人らが部落へかついで歸る頃だ。
夕月が出る前
アルヽの吊橋にも似た土橋をわたつて
童子童女はひろ〳〵とこゝへ來た。
童女は袂から銀色のチョコレートを出し
夕ぐれの光茫の中で

青々と螢めくさまに掌にのせた

今は悲しみは失はれ
夕月の影が靜かに足もとから
片側の蘆の葉に斜にかゝる
童女・私は自分の魂をどこに置きわすれたか判らない。
けれども見失ひの果は
茫々と空に眼をあげる
童子は石をひろつて
蘆の中にさわぐ
かつて憂ひしらぬ小鳥らに投げた

遠く土堤の上に鮮人らはのぼりゆき
暮蒼の中に
草にうづくまつて火を焚いてゐる

——一九二七・六——

九月

天地に金砂子の光りがあり
嶋々をめぐつて
藍青の梵音海潮音は高まるが
なかぞらは梨の味する風吹き
私はその黑い核子のやうなひとり

これは一瞬の虛無の時
いつの間にどこに失つたか？
あの名宛（あどれす）を青く印刷した
護符のやうな一片の紙は

——今は夢にも入らなくなつたが——
手紙は老いた蝶のやうによごれ
いたづらに符箋のはゞたき多く歸つてくる
あゝ　それもいゝ
夏それを書いたのは熱情と亢奮であつた。

たまたまあかつき胸洞に反響するもの音をきけば
ひろ〳〵と白い河原から
レールの錆びた曲線をつたつて顫へくるトロのきしり
きう、この家をめぐる空漠の砂地をこそさびしい九月の核心が領する。

九月——

今は私は何も持たない
私は人々の面影とも別れはて
歸る所も忘れた。
日の光りは梨地の金ながら
中には虚無の風が流れ
黑い核子のやうな酸いひとり。

——一九二七・九——

菜の花の中の

菜の花の中の
船みたいな五軒長屋で
左端の出窓に腰かけてゐるが
菜の花の匂ひがむん〳〵押すのでおつこちない。
いつも最後の手段をとる女なのに。

蛙は胸の中でなく
いや蛙は髪の中でなく
いや眼の水晶液に住む
人間のいだく悲しみは

みな蛙に食はしてしまひ
私の魂はたんぽいつぱいに
ひろがりたゞよつてゐる

――一九二七・四――

昔の陽と風

昔のことは
草つ原で水たまりがひかつてゐるやうだ。

其處でたんぽゝの銀色のわた毛が
いつもはるかに帆かけてゐるのだ――
（青空への歡喜の心をうたふ微かな音符）

昔大切にしまつて置いた
光る縞のある小石などを
いつかふとみつける事もあるかと

時々埃の片隅をさがしてみる
白い晝の月のやうな荒れた手で。
葱の香のあをく染んだ指で。

——一九二六・一二——

街をゆく妖女（フエアリイ）

十一月の夕空が孔雀石の如く冷えた時
私は風に乘つて街を通つて行つた。
空氣はきちんきちんと立體を積みかさね、寒く透明であつたが
影が湧き出ようとして、あじさゐ色の鬼どもはその誕生のまわりを踊つてゐた。
鋪道は撒水の濡れをよりつきがたく青く光らし
私の心にいはれなき反抗心をあげさせた。
私は愁へにたえず思はず大聲に叫んだ
「これは手ひどく愛なき物質だ」

私が腕をうなじに卷き、面をたれて通つてゆくと
この街を構成するあらゆる冷めたくなめらかな平面から
そろそろと悲しい靄がにじみ出して來た。
空氣が蛋白石の如きものとなり、そして無限の展性をもつてゐた。
あざみ色の屋根はそのまるみを深くし、街路樹は藻となつた。
又店の窓毎に薄明るい、彈力ある燈が
中心から七寸づゝの葩をひろげた。
私はふりかへつて、この風景が更に胸にからまりやすく
又しめりやすい蒼銀に變貌した事をみた
私の軀けりゆく心は疲れて來た。

半流動の空氣に私は次第に融けゆき

終には街をひたして擴かりたゞよつて行つた——
色なく悲しみなき數萬のくらげの如く。

——一九二六・一一——

夢々の國（ネヴァーランド）

太陽はソプラノで歌つて居たつけ。
わだかまつた藤の根の家で
私はたんぽゝのやうな小さいお母さんだつた。
小さなお父さんたちは
けだものを獵りに行つたので
私は乳色のくろうばの花でお家をかざつた。
小さな赤ちやんたちが甘えると
しやぼん玉の樣な想像がうむ
卽興の樂しいお話をきかせたり
山羊のお乳をのませたりした。

それも紫陽花の花の下でしぼるまねをしたつけ。

山々は遠く明るく透明な色で
風の吹く度に漣がよせるやうに
ふーつと一層青くなるやうに思へた。

幼稚園には異人さんがゐて
いろんな夢をはぐくむ舊約的な繪が澤山あつた。
あの時のピイターパン達はどこへ行つたらう。
原始のまゝの妖精のかくれてゐる
椎の木の洞のお臺所もどうなつたらう。
くろうばの葉などの

不可思議に美しい葉紋の象形文字を
あの時はどんな風に讀んでゐただらう。

——一九二六・一〇——

ざわめく竹藪

大風の日
竹藪へはひつて御覽

風が吹くたび
あかるい翳がうたふよ

靜寂の大地に生えても
竹は大空の風を戀ひ
竹にもたれたこの身も
共にとめがたく搖れあこがれるよ

——一九二五・一〇——

九月

九月は、厨の棚に醬油も玉虫色
九月は、糊つけ高く干すに
青く半透明の中空を、太陽は黄金虫の如くとぶ
九月は、年老いた蜘蛛の狀(さま)して
赭ちやけた木の葉は地をはしる

指くろ〳〵と亞炭割りて風呂焚けば
煙ひやうひやうと空をゆき
數萬の羽あかるき蛾となりて光をくだく。

馬鈴薯は鍋に
蝶の翅の如く粉ふいて
ほう、ほう、あたゝかい黄色だ。

天窓から四角な物質の如く流れ入つてゐる日光を
竈の下にゐて思ふ存分吸ひふくらし
蚤は一度に RiRii と翅をふるはさう

飯櫃の金具が片すみでひかる夜は
腹眞紅の虫があたりをかさこそ
なんとつややかな黒鬚たて、瓜の種を甜ること。

風吹けば腕高く揚げたき九月
昆虫(むし)ども親しい九月
卵を透かす明るさ大地にみちて……。

――一九二五・九――

故郷の感

子供らはなぜあゝ遠くへ行かうとするのだらう
なぜ遠心力は落ち潮のやうにたくましい腕で　親のもとにゐる子供らを拉
してゆくのだ
子供らはなぜあんなにせつかちなのだ
大いそぎで流れる河のやうだ
あたりの風景を映さうともしない
たゞもつと遠くに美しく光る眞實を幻想してゐる
心には絶えず潮が渦まいてゐて
群青色の朝顔のやうな大洋はひらいたりつぼんだりしてゐるのだ。
何を愛し何をにくんでゐるのだ

何を探がし何を動搖してゐるのだ
一本の菊を投げ入れるにもいぢりまはすのは愚かなことなのに。
なぜ親たちをみすてゝゆくのだ　なぜ親を淋しくするのだ。
なぜだ。なぜだ。

私たちは新らしい希望を探がす
地下莖からのびる竹のやうにゆく
私たちは遠い曙の方へゆく
私たちは高い梢にのぼつてすでに新らしい光りをみつけたのだ
私たちは大いなる秩序を愛す
天河の公轉の如きものを愛す
鋼鐵的に光るものを、ガラスの切口のやうなものを愛す

幾何的圖面を、切斷的な音響を愛す
私たちは一線を引く
父母（ちゝはゝ）の生活は季節のやうに安定して
もう何を置きなほすことも附加することも出來ないのだ
はるかに遠くなる父母の横顔はさびしいナ
ひな鳥の割つて出た卵の殼のやうにうつろにさびしいナ
私たちは盲ひたる愛をすりぬけてゆく。

——一九三〇・八初——

火

火

*煮えたる鍋のやうな憤りが胸に。
生活の火に跳り身もだへ。

*最後のトラムペットは鳴りわたる
審判者火のハムマー持つて空にあらはれ
その一生に一戰をも試みざりし女性ども
焰に燒かるゝ蹶(アナウラ)して彗星のやうに條痕！墜ちる　墜ちる

*私が掌銃の丸を頰にあて
そろ〳〵ころがして居りましたら

その未發の速度とうなりと破裂力は
指先へ脈のやうにつたはりました。又舌にも、
私はいたく感動して忽ち手品師のやうな手つきで
その丸を呑みこんでしまひました。
今は銃丸は私自身です

——一九三〇・七——

岩・氷

岩の裂目にだん〳〵張りみちてくる氷は
我と我身に生じようとする千萬の手を感じる
どこか自由へのすき間を求める千萬の手を——

又熔岩の中にダイヤが生れる時のやうに我身を感じる
息づまる熱度の極み
壓力の終り——

おゝ、いつかは稲妻のやうな腕を
岩の中へぬく手もみせず割き入れるよ　氷は。

そんな氷の想ひが私の内に絶えず響いてゐる
だん〳〵身動きも出來なくなるのだ

――(私はひゞ入り碎けたつていゝ。私の殼は。
内にあたらしい光るものが
ダイヤのやうに在るならば)――
今は私はさう思ふ
だが！私にはどうする決心もつきはしない

氷はだん〳〵張りみちる

千萬の手が扉を叩く
だが！　岩は一生懸命こらへてゐる
寒辣な空氣の中に身動きも出來ないで。

――一九三〇・四――

コーヒーの進軍ラッパ

——小さきインテリの一人はうたへる——

今日
このマイヤアの歴史教科書の腕にかゝる重さ、
あゝ又これを頭につめこむのか！

だが疲憊の身體をはげまし
不眠の神經を鞭打つため
黒く苦がいコーヒーを
進軍ラッパの如くのみほし
かくて私は一日を出かける。

長いスタッキングをそろへ
鈴蘭の花のやうに並んで
友は朝の空氣をけつてゆくが
お嬢さんたちよ
私は知つてゐますよ
華やかで賢さうで蝶のやうに輕やかでも
貴方がたの内はどんなに空虚の部屋であるか。

呪ひあれ！
美しく愚かな盲目の蝶どもに。
いつまでも時代の中空に群立ち舞つてたのしくあるがいゝ。
私は知らない。

ひるがへる友らの翅の間にゐて
私は更に苦しく人生が急がれる

過勞の身體をめぐる血管に
不眠の神經を鞭打つは
黑く苦がいコーヒーの歌。

あゝ大地の引力にさからつて
學校の無味な二階へのぼるのは
なんとものういことぞ！

早くも傾ける階級の憂鬱に
觸角をふれてつかれ切つてはゐるが
せめてはひとり窓に腰かけ
眼鏡するどくみがいて居よう。
幼き眼に正しく人生をむかへんため。

——一九二五・一〇——

跋

私は此詩集に對して、進んで跋を物すべく約束した。此作者はそも〳〵その詩作の最初のデビューに於て、私を驚嘆せしめた若い女性の一人である。爾來七八年、私は彼女の彗星的高抵抗を凝視して來た。

――藝術は蠶のやうなもの！

彼女は身構へる。そして女戰士のやうに戟鉾を横たへる。「茘色の炎」のやうな眼をして。

＊

「グレンデルの母親」は、まだ若い。嬰兒を護つてその洞の入口に眼を光らしてゐる。然しその怪奇性に於て、紫暗色の好みに於て、彼女は「鑛物性的新鮮」だ。「鋼鐵的光輝」を備へてゐる。そして「星々の鬱血質」をもつて、神話を、天界を、社會を、愛を、自由を截斷しようとする。彼女の旗色はその獨逸的な、更に北歐的な「グレンデルの母親」の眼だ。

*

彼女の氷河風な推理感情に就いて。
彼女の流線的哲學的組み立てに就いて。
彼女の舊約風な奔放と强靱性に就いて。
君は彼女を自由に判決すべきだ。
君は「グレンデルの母親」を殺戮するか畏怖すべきかである。

*

「冬の洞」を出でゝ「九月」に於て、彼女はルーベンス風な豐嬌を隱見させ、ヴェラスケス風な正確な位置と、デユラー風の裝飾を好み、時にグレコの高逸と、ブレーク風の暗晦神秘を生み、更にルオー、セザンヌ風の近代味を描く。
彼女の繪畫風な組立ては、內により熱情的な、然かも北歐的な鬱血をふくんで、寧ろ寡默的に事物を批判する。その裝飾は黑、時に白、純潔で、强勁で、男性的ではあるが、一脈の北方の朝紅、比類のない蝶類、鑛物のやうな、星のやうな草花もあるではないか。

*

「グレンデルの母親」特に、「冬の洞」に於て、私はデユラーの「メランコリヤ」と題する繪を思ひ起す。その北方的女性の眼、古い天體觀測機、鋼鐵條の極光、その古典的衣裳、彼女は笑はぬ。泣かぬ。常に思惟する。運命のコースを凝視する。前方にあるものを望んで戰ひを用意する。
然しそこに春が來、自然が廻轉し、火が燃え初めると、彼女は哲學し、推理することを弱めて、チントレツト風な、チ、アン風な肢態を隱見させながら、街を往き、野を往き、そして夜は亦その深紅の暗い帳の中へ歸る。彼女は笑はない、遊ばない、唄はうとしない、淫らにふざける事をしない。しかく彼女は敎養づけられ、性格づけられ、星的制限の範圍に於て、黑い重い音樂を奏する。

*

「火」に於て、彼女は率先して解放され、ソビエートの娘のやうに批判し行動する。
このコンソモールカは情純だ。新らしい若い母だ。階級性闘心に於て、その社會的負擔の協調心に於て、地方實行委員の如く、都市を往く。そして路傍の草虫の音樂

に、市街の喧燥に、拳銃の如く、リンネルの如く、新らしく潑溂と往く。

*

彼女は傳說を出る。運命を出る。個的性癖を出る。そして世界線上の意識に於て、新らしく仕事を初めるであらう。「グレンデルの母親」はプーシキンの如く、時には北歐の「サガ」の如く、彼女の秘匣に殘るであらう。次に輯められるものこそ更に期待すべきである。

然しその時は私達は、既に半過去の人文誌にその形骸を置くであらう。「藝術は蠶のやうに」彼女を拉し去る。そして私達は彼女に時代の光輝を預けて眠るであらう。

*

彼女の最初の詩作は、その故郷の「小作爭議」と中產階級の沒落を描破した長編であつたやうに記憶する。當時名古屋に於て十七歲の女學生であつた彼女は、その類なき組織的な、論理的な、然も强靱な特質によつて、多くの若い詩徒の小運動にも加はらず、信ずるところのある路を孤り歩いてゐた。友として私と高木斐瑳雄がゐた。

爾來七八年は經過したらう。彼女は大阪に移り、「浪花詩人」「詩之家」に在つて、その舊約の花嫁風な、或はソビエートの娘のやうな詩彈を一意塡裝してゐた。「グレンデルの母親」は、あまりに遲く、そしてあまりに靜かに現出する。他の無產的詩作婦人の中に、或はナンセンスなヂヤーナル女詩人の中に……。

*

然し「グレンデルの母親」は判然と位置をもつてゐる。

哲學をもつてゐる。組織をもつてゐる。

藝術が人を組織するか。

人が藝術を組織するか。

「グレンデルの母親」はそれに立派な答案をもつてゐる。

私は斯く信じ、そして推薦する。玆に超時代的な、そして確固たる傳統と本道があるといふことを。

*

私は一種藝術的な衝動と反逆意識でこの跋を書いてゐる。

私は「グレンデルの母親」を、より正しく、より的確に認識し、批判し、推薦したいために。そして此「グレンデルの母親」の作者の未來へかけての嘱望に胸を熱くして。

私は斯く信じ爾云ふ。

——藝術は蠶のやうなもの！

若い彼女は高抵抗式に應ずる。以て此詩集を耽讀する人々に、私もよりよき批判を願ひたいと思ふ。

昭和五年十月・詩之家にて

佐藤惣之助誌す

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

グレンデルの母親
（定價金壹圓貳十錢）

著作者　永瀬清子
發行者　東京府豐多摩郡大久保町西大久保五一七　伊藤伍兵衛
印刷者　東京市神田區表猿樂町二番地　中村修二
印刷所　東京市神田區表猿樂町二番地　株式會社開明堂東京支店

發行所　東京府豐多摩郡大久保町西大久保五一七　歌人房
發賣所　東京市神田區表神保町　上田屋書店

詩之家刊詩集

・Q氏の世界　潮田武雄著　一五〇
・昂　鹽川秀次郎著　一〇〇
・ソコル　竹中久七著　一〇〇
・エスタの町　渡邊修三著　一二〇
・こわれた街　衣卷省三著　一〇〇
・母の昇天　山口芳光著　一二〇
・老子降誕　古川賢一郎著　一〇〇
・黄蜂　森　千魁著　一〇〇
・虜囚　吉岡清橘著　一〇〇
・七つの顔　杉浦杜夫著　八〇
・波止場での殺意　越智彈政著　一二〇
・虐待される街　藤村　端著　一二〇
・霜害警報　清水房之丞著　一〇〇
・獸族美學　近藤　武著　一〇〇
・グレンデルの母親　永瀨清子著　一二〇